

菅 季治：「文芸的心理学への試み」序説(その1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田切, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007887

菅 季治：「文芸的心理学への試み」序説（その1）

小 田 切 正*

菅 季治(1917～1950)は、若くして生涯を閉じた、ひとりの忘れられた哲学者であり、北海道が生んだ教師でもある。その残したしごとは、25才から26才にかけて執筆されたものであるが、自由のない、不毛な時代にもかかわらず、その哲学、思想、文学、人間にむけた関心は、知識人としてのたしかな思索のあとをしめしており、その稀有な思想と生き方は、いまに生きつづけている。その核心は、自己同一性がいかにして成りたつか、という自己と他者との関係性、相互関係（はたらきかけ、相互活動）にむけられている、と同時に、同一性における、一人ひとりの内面のうごき、欲望（そのあらわれとしての快と不快）のあらわれ方にたいする、心理・行動の観察（記録）にむけられているのが特質である。

菅の遺著「哲学の論理」は、人間のあり方のうちでも「他者」との関係性を追求しているが、これにたいして「人生の論理—文芸的心理学への試み」は、獲得されるべき自己、同時に、そこにあるものをつつみ、みずからをつくりだしていくなまの自己実現のプロセスをえがきだして、感情—情念の世界を基本に一個の人間学の構築をめざしている。本稿は、その成りたち、内容と方法、ならびにその先駆としての意義をあきらかにした。

（キーワード：菅 季治、自己同一性、感情—情念、文芸的心理学）

1. はじめに

本論文は、菅 季治著「人生の論理—文芸的心理学への試み」(1943年9月脱稿、1950年、草美社刊)から、ひとりの哲学徒の戦争下の人間学的、思索と行動についてあきらかにするものである。のちにみるように、この考察には、古今の文学、哲学、思想、文芸をかりた、人間心理へのいわば臨床的追求とともに、若い学徒によるめざましい人間学の構築がめざされており、ひとつの到達点を形づくっている。論文名は、副題からとって「文芸的心理学への試み」序説とした。

2. 菅 季治について

はじめに、菅 季治(かん・すえはる)の略歴の紹介からはじめよう。

1917(大正6年)7月19日、父勝吉・母ツ子の、7人兄弟姉妹の三男として生まれる。(本籍地、愛媛県宇摩郡根津村890番地)

1922年 北海道常呂郡野付牛町(現北見市)に移住する。菅の成長期、父母は染物業を営み、使用人がいるなどして、近在の木材工場の印伴天や漁場の大漁旗を一手に引き受けていた(屋号は三吉堂染舗)。小学校、中学校(野付中学校 現北見北斗高等学校)を終え、1935年(昭和10年)、東京高等師範学校文科に入学、3学年終了後、東京文理科大学哲学科に入学、務台理作、田中 美知太郎に師事し、ギリシヤ哲学

* 北海道教育大学旭川校

およびヘーゲル哲学を学ぶ。

卒業とともに、1941年3月、北海道旭川師範学校教諭として着任、翌年9月まで「公民科」「教育」の授業を担当、ギリシヤ哲学、論理学の異色の授業で生徒から敬愛される。学問が対象とするのは、人間であり、そのうちと、そとを学ぶことだ、と鮮烈に説いたという。(1941年12月8日「大東亜戦争」勃発する)

1942年11月、西田 幾多郎、田辺 元がいる京都大学大学院にすすむ。43年3月から京都府立第五中学校嘱託。(数学、物理、英語担当)同年11月30日、召集される(このとき菅は26歳)。京都駅を発つとき、つぎの時代は、人間の精神がかがやく世界だとわかれの挨拶をする。戦局が敗戦にむかって転がりつつあったこの時期、政府は、学生・生徒の徴兵猶予を全面廃止し、理工科系以外の、ほぼ13万人以上を兵営に送りこんだ。入営直前まで、「人生の論理」と「哲学の論理」の著作(戦後、それぞれ出版)に没頭する。

北海道帯広の北部第九十一部隊(高射砲連隊)に入営後は、北千島幌筵を経て幹部候補生の教育を受ける。44年7月から翌年1月末まで千葉陸軍高射砲学校に入校、のち、見習士官として満州第一二二四部隊(鞍山)に配属され、45年8月、現地で敗戦をむかえる。武装解除後、9月末、奉天の皇姑屯から部隊とともに乗車、11月初旬、中央アジア、カザフ共和国カラガンダに到着、俘虜生活がはじまる。

この護送中および収容生活のなかで、ソ連軍との仲だちの必要からロシア語を独学、通訳として奔走し、1000名の日本人の命綱となった。のちに述べるが、49年から50年にかけて、ソ連抑留者の送還がはじまるが、冷戦という国際的対決のなかで「政治の眼」となった「徳田要請」問題の、渦中のひとりとなり、参議院在外同胞引揚問題特別委員会(1950年3月18日)、衆議院考査特別委員会(同年4月5日)の、証人となる。

菅が死んだのは50年(昭和25年)4月6日

である。(その2カ月後、マッカーサーの指示により日本共産党幹部の追放がおこなわれ、同年警察予備隊が創設される。朝鮮半島の38度線全域を突破して全面的な戦争がおこったのは、こうしたのちのことである)32歳の生涯だった。

抑留生活を綴った遺著に「語られざる真実」(1950年、筑摩書房)がある。これには、前記、衆参特別委員会の会議録(抄録)ならびに座談会「菅 季治の死をめぐって」(出席者、臼井吉見、唐木順三、務台理作、石塚為雄、中島健蔵、森 有正)が収められている。(復刻は、同名の日本図書センター刊、「戦争と平和」市民の記録、19巻、解説は小田切)

3. 師範学校教師として

さて、以上からもわかるが、15年戦争下の日本、そして敗戦(シベリヤ抑留)、そのごのアメリカ占領軍の支配と、戦後民主主義への激動といった、日本国民が直面した未曾有の困難と苦渋を一生ににじませたのが、菅のみじかい人生であったのであり、したがって菅の人間をえがきだし、その思索と行動をみるには、戦前・戦後の潮流に直接、かかわらせてあきらかにすることがたいせつである。こうした、菅 季治については、これまで折りにふれてみてきたが⁽¹⁾、ここでは、表題ががゆるすかぎり述べることで、遺著「人生の論理—文芸的心理学への試み」にそうて、その人間考察と、その思索について検討することにしたい。

いまひとつ、さきの略歴で注目したいのは、北海道旭川師範学校教諭(1941年3月～1942年9月)としての菅 季治についてである。(まさに、戦争体制のもとにあった旭川師範学校への着任だった)⁽²⁾ この1年6カ月のあいだの教職については卒業生の記録、ならびに筆者のこれまで得た少なくない証言があるので、はじめに記録としてあげておきたい。

「菅先生といえば、最初に思い出すのはその風ぼうである。額にかぶさってくる髪をときどきかきあげながら、ときとして下唇をな

めるような仕草をまじえて、とつとつと講義をすすめる姿である。当時、旭川師範の4年生であった私たちは、ようやく中学校的な教科のなかに、心理学とか論理学といった、やや高度な科目が加えられたことに、好奇心とともに、いくらか旧制高校のまねごとのようなプライドを満足させられた気持ちでいたのである。その論理学の先生が菅先生であった。

無味乾燥な内容のなかに、先生は、ゲーテの「ファウスト」からの引用をまじえ(中略)、また哲学という学問のあることを知りはじめた私たちに、「哲学とは学ぶものではなく、哲学することである」等々といった、私たちに、新鮮な学問の香気が、先生の身体からふき出してくるような感動につつまれたものであった。

哲学や文学にあこがれはじめた友だちと、先生の下宿を訪ねたことが何度かある。(中略)先生の部屋は…岩波文庫が、本箱にぎっしりつめこまれたまま、部屋の隅につみあげられていたのを思い出す。(以下略)」「(織田泰之「わが師 菅 季治先生」)⁽³⁾

「(上略)新しく赴任された菅先生は一部(注高等科2学年終了後、師範入学の者)5年の「公民」の授業を担当しました。その最初の授業時間のとき、公民の教科書をパラパラとめくって「この教科書は読んでおくだけでよい。」そう言って黒板にむかい「論理学の基礎」と書きました。これから一年間、論理学の基礎として、ギリシヤ哲学(史)を講義するというのです。(中略)

英語、ドイツ語、ギリシヤ語をマスターしていた先生は、ギリシヤ語を書きながら講義しますので、私たちはそれが読めなくて苦労しましたが、ギリシヤ哲学の深奥にふれる思いがしました。

それから夏休みの終わった9月初旬頃だったと思いますが、元級留置を受けた5人の者たち(美術部教師、熊田満佐吾が1941年1月

10日、治安維持法違反として検挙されたのち、学校の取調べをうけ、美術部員、佐藤滝次、松本五郎、小松 厚、菱谷良一、米沢仁郎(留年)で、先生のアパートをたずねました。ギリシヤ哲学(史)の講義をきいているうちに、先生への絶大な信頼感を抱いていたからにほかなりません。(中略)

私たちは、元級留置処分を受けた事情を説明しましたところ、だまって話を聞いていた先生は、とつぜん「一緒に学習会をしよう」といいだしました。しかし学校から監視されている私たちですから、やりたいのですが自重します、といいますと「そうだな」といって、しばし口を閉じて考えていましたが、やがて押入れのなかから何冊も書物をだして、ひろげて、これらの本は、ものの考えかたを身につけていくうえで、ぜひ読んでおいたらよい書物だといって一冊ずつ解説してくれました。(中略)

そのご、私たちは、9月下旬、特高警察に検束されましたので、あのアパートをたずねたときの、菅先生とのふれあいが、さいごになりました。じっと眼を閉じて、私たちの話しをきいていた菅先生の姿が、いまでもありありと、よみがえってまいります。(小松 厚「菅 季治先生のこと」)⁽⁴⁾

「昭和16年4月、おでこの広いやせ顔で、黒ぶち眼鏡をかけた文学青年らしい先生が赴任された。この菅先生が、私たち二年三組の担任となった。当時は、戦争中であり、ほかの先生は権威をふりまく授業が多かったが、先生は庶民的であり、文学的な才能をいかしながら、カントやヘーゲルの哲学をわかりやすく教えてくれた。(中略)学級のことで教官室へ連絡にいくと、「城君、すまないが、下宿にいった和辻先生の哲学の本、二冊もってきてくれないか」と、頼まれたことがたびたびあった。

先生が話してくれたことで忘れられないこ

とがある。「城君、戦争なんかつまらないな、国民の気持ちも考えず、一部の権力者がやりたいようにやるのだから…」「先生でも、ぼくでも自分の意志に反して召集令状がきたらどうしますか」と、たずねると、「きみ、そのときはなただけ犬死にしないよう考えるだけさ」と、そしらぬ顔でこたえてくださった。(以下略)(城 文作「菅先生との出会い」)⁽⁵⁾

これ以上、あげることはしないが、師範学校という国家枢要の使命を担った教師養成の、それも時局に押しながされ、翻弄されるといった状況のもとで、菅の、とつとつとした哲学、文学をもってする語りかけは、年わかい生徒にとって人間・人生を考えさせる、知的興奮をよぶものであったのである。天気の良い日でも、長靴をはいていたことなど、風がわりなところも、いまでも卒業生の記憶のなかにある。いつも本を手ばなさず、授業となると、ギリシヤ語をまじえ、ソクラテスからプラトンへ、そして古代ギリシヤの人間の思索のあとをたどって、考えさせてくれるたのしみがあった。

話が、生成変化の過程こそが理法だという、あのヘラクレイトスの「万物は、流転する」(panta rhai)のことばにおよんで、世界認識・世界観に目がひられる思いがしたという。「人間は社会的動物である」(アリストテレス)という、菅の解説をとおして、社会とはなにか、そのなりたち、しくみ、くらし・生活とはなにか、と授業が展開していくことがあったのである。⁽⁶⁾

自分とは、いくらも年のちがわない生徒たちに、こうしてギリシヤ哲学(史)のなかの、人間の英知といったものをかかげて、人間、人生、世界、時代を考えさせようとしたのが、菅だったのである。

織田、小松、城の記録には、そうした菅のきわだった学徒としてのおもかげが、うきぼりにされており、その姿勢が伝わってくるように思われる。

石戸谷 栄蔵(1943年、師範中退)の証言

をきいてみよう。その記憶は、いまでもあざやかである。論理学の授業は、人生どう生きるか、についてのものだったが、自分のありのままの感情、欲求をだいじにすることを基本として、それを知性にまでたかめていくのでなければならぬというものだった。なにごととも神がかったもののいいしかできない、その時期、石戸谷はダーヴィニズムにたった考えかたが人間と生物、自然をつなぐものと考えていたが、菅の思考は、知性をたいせつにした点でもすぐれていた、というのである。人のうちとそとの、コトガラ、コノコト、アノコトに目をむけ、考え、追求することが哲学の問題でなければならない、としたのも大きなおどろきであったという。時局は、そうした人間のコト、社会のコトに目を徹底してふさぐという苛烈な、統制のなかであったし、その思想に光るものをかんじたというのである⁽⁷⁾。

さいごに松本五郎の証言をあげておこう。

「生活図画事件」(注、小松の記録とかさなるが、くわしくは拙著「戦時下 北方美術教育運動、1974年参照)で留年となった4月から、検挙される9月20日まで、わずか半年にみたない日時であったが、くらく、しずみがちなわたくしたちを鼓舞し、激励してくださった、人間的にあたたかい先生だった。学問的にふかいものをもって、わたしたちを魅了してくれた、ちからのある先生、人間としての生きかたをもって、どんな圧迫があろうと、屈しない意志と身をもって行動し、指導してくださったのが菅先生でした。いま70歳をむかえ、老齢期に入ったわたくしですが、いまでもわたくしの生きていくうえで、先生の生きかたがささえになっているように思うのです」(1989年4月4日付 筆者宛私信)

4. 「人生の論理」の成りたち

本論にはいるにさきだって「人生の論理」のなりたちについてふれておきたい。師範学校在職中の菅の体験と、哲学、文学における思索を

柱にして骨格をつくったのが本書であり、日記によると、京都大学にすすんだ頃から意図的に書きはじめ、1943年8、9月に書きおわっている。(もう一つの遺著「哲学の論理」は、これと平行して執筆されており、日記には、1943年11月2日 清書するとある)京都大学は、菅が期待したほどのものでなく、大学もまた、戦争下のなかで、この期待にこたえるものでなかった、このことが(そして召集という予感が)本書の執筆にむかわせたと思われる。

召集の直前(1943年11月30日召集)、ノートは、恩師の田中 美知太郎にあずけられたが、空襲で消失、戦後、シベリア抑留から帰還(1949年11月27日)後、さきに略記した国会への喚問(1950年3月18日、同4月5日)という窮迫した状況のなかで、もと原稿を清書しおわったのが、死の直前である。その5月、遺志によって草美社(A5版)から刊行されたものである。

遺著の目次、内容、ともに執筆時(1947～1948年)そのままのものと考えられるが、一、二の点で、清書したときに、みずからの緊迫した証人喚問という体験のなかで、加筆し、考察したとおもえるふしがある。この点については、のちに注記することにした。戦時という、だれもが、死のみが生きがいとされた、苛烈な時代における、ひとりの哲学徒の人間記録(観察と考察)が、本書の真髓であることは、そのふかい情念、感情にたいする洞察からも理解されるだろう、と思われる。

はじめに目次をあげておこう。

もくじ

口絵……………著者と筆蹟

題字……………務台 理作

序文……………田中 美知太郎

前がき

原理

I すべてのものは自分自身であろうとする

II 人間のあり方の第一次的あらわれは、気

もちである

III 基本的な気持ちは、欲望、快と不快である

IV 現象的説明

一 愛

二 憎しみ

三 競争意識

四 孤独

五 羞恥

六 弱い魂

七 世間

八 卑屈

九 禮儀

十 成り上がりと成り下がり

十一 たいくつ

後がき

跋文

菅 忠雄

装丁

石塚為雄

(以上 全182頁)

5. ダイナミッシュな自己同一とは

―戦時のなかで

本論にはいろいろ。「すべてのものは自分自身であろうとする」が、では、それは、どのように成りたつのだろうか。この命題の追求と問いが、菅の哲学的、思索の根本にあるものであり、「はじめに―原理」の書きだしの部分となっている。

だが、普通の論理や形而上学でいわれているのは、「すべてのものは、それぞれ自分自身と同じである。…そのもの自身ではないこと、すなわち矛盾はあり得ない」というそれである。この、ただの無条件の「自己同一」にたいして、活動的(ダイナミッシュ)な自己同一をのかかげ、すべてのものに通じるもののあり方の探求、考察をめざしたのが、菅の出発点である。では、「ダイナミッシュな自己同一」は、どのようにして成りたつか。

『ものの自己同一はそのものの力、働きがなくなるとき、ものは矛盾するものである。

ものは矛盾から自己同一を得、また保つために働きつとめるのである。もののそのようなあり方を、わたしは、「自分自身であろうとする」という言葉でいいあらわしてみたらどうか、と思う……ここで、あるものをそのもの自身であらせることを「肯定する」ということにするなら、こういうことにもなる—ものは自分自身を肯定しようとつとめ、自分が否定されてあること、また自分を否定するものを否定しようと働く』(17～18頁)⁽⁸⁾

こうして「(すべてのものが)自分自身であろうとする」自己同一とは、そのものをささえるちから、はたらきそのものであり、と同時に、自己を否定するものを否定するというはたらきそのもの(矛盾から肯定的な、自己同一へ)によって、そのダイナミッシュな自己同一が得られる、というのである。こうみると、ただの自己同一が、真の自己同一ではないのはあきらかであり、「自分の生成の過程をともなった結果」(ヘーゲル、「精神現象学」序言、ラッソン版、11ページ)「自分が自分になること」(同、20ページ)をとおして、はじめて自己同一、すなわち自分自身が成り立つのである。

そしてその「自分自身の生成の過程」についていうなら、はじめから「完全」(テレイオン)というものはありえないし、欠けるところなく備わっているものはあるはずはないのである。こうして「自分に欠けているものを補い足して自分を完成し……また傷つけそこなうもの、つまり自分を否定するものをしりぞけ扱い」、「自分の発展をとおってはじめて自分を完成」(「精神現象学」21ページ)するというのが、あきらかになる(20～21ページ)^{(9) (10)}。

菅のいう、こうした「自己同一」についての発展的、発達論的な追求は、さきのように、ただの自己同一ではない、ダイナミッシュな活動と、そのはたらきそのものをふまえたものであり、そうであって、「すべてのものは、自分自身である」ことができるというのである。この

「アクセントづけられた自己同一」「ダイナミッシュな自己同一」とは何かについてふれたものに、さらにつぎのものがある。

『古くから論理の用語でもものの「規定」とか「属性」とかいうものは、実はあるものをまさにそのものであらせる力、そのものとしてささえ、またしめす働きのあらわれなのである。だから、あるものがまさにそのものとして成り立つためには、とうぜん規定、属性を必要とするわけである。(中略)そしてこれにつながるのはヘーゲルのつぎの言葉である。「主語は、述語においてはじめて自分のあきらかな規定と内容をもつ。だから主語それ自身は、ただの観念、空虚な名目である。……主語が何であるかは、述語においてはじめて言われる」』(「エンチクロペディ」第169節)

これには、つぎの文章がつづいている。

『属性や規定を、このように自己同一のための力、働きと解することによって、わたしたちは「 $\times$ は $\times$ である」といった、ただの自己同一がけっして真の自己同一では有り得ないことが、……知ることができるだろう。ただ $\times$ というだけでは、それを $\times$ であらせる力、それを $\times$ としてささえしめす力がないのであり、そのことは、 $\times$ が何であるかを定めあらわす規定や属性がないということなのである。だからそれは、ほんとうに $\times$ であるのかどうか、定まりもわかりもしない、ただ何とも定まらずわからぬ一つのものである。それはただのレッテルであり、ヘーゲル流に言えば、「ただの観念、空虚な名目」である。(中略)そしてこのような事情から、あの「 $\times$ は $\times$ である」という文句がおこす「なあんだ、つまらない」という気持ち、張り合い抜けの感じも、説明され得るだろう」』(21～23頁)

少しながい引用になったが、こうしてヘーゲルの「主語が何であるかは、述語においてはじめて言われる」とあるように、「 $\times$ は $\times$ である」

「これは×だ」「×としての×」「×そのもの」といった×ではなく、×とは何か、それをささえるちからを活発にし、はたらきしめすということによって、主語(注、「自分自身」「自己同一」)の本体がいっそういきいきとあきらかになる、というのである。菅のこの指摘のように「ものの自己同一」とは、「これは×だ」とがんばってレッテルをはって、それで、そのものの自己同一をしめしたことになるし、また、そのものの本体をあきらかにしたこともならないのである。まさに人間というのは、みずからのダイナミッシュな、そのささえるちからとはたらき(属性や規定)によって、「自分自身になる」ことが可能となるのである。こうした意味づけに、つぎのスピノザの「エチカ」(Ethica, 1677)からの含蓄のある引用がある。

「ものがいっそう多くの実在、あるいは有を所有するにしたがって、ますます多くの属性がそれに帰する」(第一部定理第九)

「おのおのの属性は、本体の実在、あるいは有を表示する」(第一部定理第十)⁽¹¹⁾

スピノザ(B. Spinoza 1632～1677)については、のちに述べることにするが、ひとことでいうなら、人間がいよいよ多くの実在性(あるいは有)をもち、したがって多くの属性をもつことによって、みずからを形成していく(注「本体の実在、あるいは有を表示する」)ことができるというものである。そのばあい、属性の問題とは、自分自身をささえる、まさにそのあり方と必然の追求そのものであったのである。

ここまできて、こう書かれたのが、1947年から1948年においてであることを考えたなら、菅の旭川における生活が、その思索と思想形成のよりどころだとみるのはしぜんなことだと思われる。菅の社会における、実生活らしい生活といえば、その教職経験が唯一のものであり、その発達論の見地や、観念的な、空虚な人間理解(「×は×だ」「×としての×」)としてみる固定的なみ方、レッテルにもとづいた形式主義)にた

いする痛烈な批判も、こうした実生活が、そのたしか目と人間についてのみ方といったものを形づくっていったと考えられる。

「人生の論理」について、1年6カ月の在職経験が、その思索をささえ、思想形成のつよい動機、伏線となっていると、指摘する卒業生がいることも注目しなければならないであろう。これまでみた、発展的・ダイナミッシュな活動論、述語的な意味をもった教育内容の構成や教養(人としてのちから)についてなど、またレッテルをはった固定的な生徒理解にたいする批判など、その日常の会話や、下宿を訪ねたときのさまざまな話、ふるまい、なにげないそのおもかげなどから、どれもがおもいあたるというのである。

戦局がけわしくなるいっぽうの、戦争への総動員体制のよびかけのなかで、学校は、理性による学習の場でも、生活の場でももはやなかった。「常在戦場」といううつろなスローガンのもとで、生徒の心はなかばすてばち、むきだしのままの荒れかただったというのである。こうした生徒をもっぱら管理の対象(もの、生徒としての「自己同一」を要求する)とみる学校生活は、菅にとってもやりきれないものであったにちがいないのである。⁽¹²⁾

小関 寅雄(1945年卒業)は、菅の哲学の命題であった「ダイナミッシュな自己同一」とは、「人間の尊厳」をかかげた「人間性へのあくなき追求」を意味しており、だれもが、教師が敵と思われかねない日々のなかで、そのヒューマンな教養は、きわだって魅力にみちたものだったと指摘している。

6. 感情・情念論への試み ― 「生きること」「人間であること」

これまで菅のいう自分自身とはなにか、の根本命題をみてきたが、いったいそれは、どのようにあらわれ、どのような人間のあり方をさすのであろうか、ここから菅は、主としてスピノザの「エチカ」をよりどころに、いわば感情・

情念論へと考察と追求をむけることになる。Ⅱ「人間のあり方の第一次的のあらわれは、気もちである」の書きだしは、ぬきだすとつぎのものである。

「(上略)それでは、人間は自分のあり方を何でしめすか。それは人間の気もちや行いだ。気もちとは心にでるあらわれ、行いは身体にでるあらわれ。そして気もちが第一次的であって、行いは気もちにもとづき、気もちのあり方をしめす。」 それでは「あのすべてのものに通じるあり方——ダイナミッシュな自己同一——は、人間においてどうあらわれているか…」(24頁)

この人間のあり方の根本の問いにつづいてつぎのように書いている。(Ⅲ)

『「ものは自分自身であろうとする」というあの基本的なあり方は、人間においては「欲望」という気もちとしてあらわれている。すなわち人間は自分であること、自己同一を得、また保つことを欲望する。そして自分でないこと、矛盾して自己同一をそこない、失うことを欲望しないで、かえってしりぞけ避けようと欲望する。アミエル(注、スイスの哲学者、1821～1881)も言っている。「生きるとは、わたしたちの物質 的精神的存在の絶滅、散扶にたいして自己を肯定していくことである。生きるとは、したがって休みなく欲望することである」(中略)

ここで、…「肯定」および「否定」の意味を思いだそう。(中略)それを…もちいるなら、上の法則はこうなる——人間は自分を肯定するもの、また自分が肯定されることを欲望する、そして自分を否定するもの、また自分が否定されることを欲望しないで、かえって否定しようと欲望する。(中略)

欲望が人間の基本的な生き方に属すること——これはスピノザがくり返し述べていることである。たとえば

「欲望とは、人間の本質が與えられたおのおのの発動によって、あることをなすように決定されたものとして考えられるかぎり、その本質である」(第三部 感情の定義一)

「欲望は人間の本質そのものである」
(第四部 定理第十八 証明)(以下略)』
(25～26頁)

こうして、人間の基本的な生き方、その本質の発動とは、欲望であることをあきらかにするとともに、生きるとは、まさにこの欲求、欲望、要求を肯定することであり、その物質的、精神的存在の絶滅、散扶、否定にたいして、これをかえって否定するのが、人間のあり方の基本、根本だというのである。

このばあい、ものの自己同一をささえているのは、ダイナミッシュな活動力であったが、いったいこの人間の活動、欲望(欲求)、要求をささえている本体はなにかが、ここで重要な追求課題になってくる。管は、この欲望、活動、要求としてのダイナミズムに注目しながら、一つには、精神と身体との関係について、二つには、根本において人間にとって身体とはなにか、について哲学的(と同時に教育学的)課題を提起し、人間の精神のはたらき・活動が、身体のはたらき・活動と密接不可分のものであることにふれているのも特筆すべきことである。

『(上略)スピノザにおいては…人間のあり方が一次的に身体的存在であった。たとえばスピノザは言っている——「人間の精神を形成する観念の対象は、身体であって他のものではない」(第二部定理第十三)ことを知るならば、つぎの二つの定理もいま述べたような欲望を語るものとして理解されるだろう。

「精神はできるだけ、身体の活動力を増加し、あるいは促進するものを表象しようと努める」(第三部定理第十二)

「もし精神が、身体の活動を減少し、あるいは妨げるものを表象する場合には、精神は

できるだけ、このものの存在を排除するものを想起することに努める」(第三部定理第十三)

そしてこの二つのスピノザの定理を…言いなおせば…「人間は、自分の活動力を増し進め、したがって自分を肯定するのを得ようとつとめる」「人間は自分の活動力を減らし妨げ、したがって自分を否定するものを否定しようとしてつとめる。つまり自己同一への欲望。』(27～28頁)

こうして、スピノザ哲学を根幹とした、菅の生(生きるということ)についての考察は、人間精神の展開を身体活動を自由にするることによって促進すること、この活動力をさまたげるものをしりぞけ、活動力そのものを解放するというのが、菅が到達した精神－身体論のおおよその枠組みと考えてよいであろう。精神としての、行動の担い手、主体としての身体をいかに自由なものとして創出するかが、死の教育・死の哲学にたいする、菅の生の哲学でもあったのであり、精神－身体論が、その大きな核心の部分を作っていると考えられるのである。

生きるとは、休みなく欲望することであるという。その欲望があるときは満たされ、あるときは満たされないということがおこる。菅は、これについて、それが満たされるばあいは「快」の気もちであり、満たされないばあいは「不快」の気持であり、「快」はよい気持、心よさ、楽しさ、幸せであり、「不快」はわるい気もち、きみのわるさ、かなしみ、不幸であるという。こうして、人間が自己同一を得、保っているあり方が、人間のあるべきよりよいあり方の気もちであり、自分でないあり方、矛盾したあり方が、不快な気もちなのである。

菅が、こうして人間の基本的な気もち・行いとしての欲望の観点にたって、快・不快、善・悪、幸・不幸とのつながりをあきらかにし、とりわけ、人間にとって善・悪とはなにかについて、スピノザの説をかりて論究しているのが特徴的である。人間が、人間であることの徹底し

た追求が、菅の根本であったことは、つぎのノートふうの説明からもあきらかだと思われる。

『「わたしたちは、わたしたちの活動力を増加し、また減少し、促進または制限するものを善あるいは悪とよぶ」(第四部 定理第八証明)さらにまた、人間にとっては、人間であることがその自己同一であるという(形式的)命題をもちだすなら、人間が人間であらせるものが善であり、人間でなくさせるものが悪である、ということにもなる。(中略)

幸せ、不幸せもまた、こういう意味での善・悪につながっている。「わたしたちは、より善いもの、あるいはより悪いものに変化するにしがって、幸せあるいは不幸せとよばれる」(第五部定理第三十九 備考)そして「幸福は、人が彼の生存を維持し得ることにある」(第四部定理第十八 備考)「幸福に、あるいは善く生活し、また行おうとするなどの欲望は、人間の本質、すなわち各人が自分の生存を維持しようと努める努力である」(第四部定理第二十一 証明)』(31～32頁)(下線は筆者のもの)

この論究は、菅の欲望－快・不快－善・悪論の頂点をなしており、その哲学(教育)的帰結、その結論といってよいであろう。

たぶんに引用の多い、抽象的でさえある文章であるにもかかわらず、人間が人間であること、そのあり方が日々にあやしげなものになり、現に、さきの保障のない、荒れた闇のような日本の存亡をむかえて、こうして生きることをめあてに、その生存の維持をストレートにかかげた、この欲望－快・不快－善・悪論の意味するものが、どんなにきくものに静かなよろこびと感動をあたえるものだったか、はかりしれない。いまもある日の授業のひとこまを脳裡にきざみ、しずかな感動をおもいかえしている卒業生もいるのである。

欲望といった、人間のトータルなおくふかい心(感情)の世界をとりあげたのも先駆であるが、人間の生存の維持と、生活をよくすることを

って善とし、その生存の「散扶」「絶滅」「否定」をもって悪とする、この問題の提出は、やがては国家による、その戦争遂行のあり方(国家の自己同一のあり方)の論究へとつながっていくはずのものである。人間が生きること、そしてどう生きるかが、菅のさけびだったのである。(戦局は、東京空襲、カダルカナル島撤退開始、米軍のアッツ島上陸、守備隊の玉砕、学生、生徒の徴兵猶予停止へと動き、日本の敗北はあきらかであった。)

7. 文芸的心理学へ

これまでが、菅の「ものが、自分自分であろうとする」根本にふれた「原理」(哲学的総論)篇だとすると、これからが、それがどのようにあらわれ、現象するか、の解析をめざした各論だということになる。「総論」は、これまでのように哲学的考察といってよいが、Ⅳは人間の心理と行動、そのさまざまなあらわれ方を各個に洞察したものであり、菅のいう、ひとの感情—欲望のあり方を論理としてとらえるという試みのものである。ここで追求されているのは、基底としての内面の感情(欲望のあり方としての)について、そのふかさと、ゆれうごきする葛藤、相剋、矛盾であり、そのつよさとよわさであり、そのおぞましさと誇り、気高さについてなどの考察(観察)である。

ひとが、ひとに隷属し、そとからくわわる力が大きくなると、隷属がいっそうふかくなるといのは、いったいなぜか、これに反して、ひとがよろこび、生命を大きくしていくのを肯定し、逆に否定するものを否定するといったことに懸命になるというのも、それぞれに心理—論理がはたらいているからにはほかならない。そのようにひとの日常における欲望の生成の過程(自分自身を肯定するばあいの感情と欲望について、自分自身を否定するものを否定するばあいの感情と欲望について)のあらわれ方とその局面へと肉迫したのが、菅の、文学・文芸と思想・哲学をかりた、いわば臨床的考察の試みである。

それには、トルストイ、チエホフ、ゴーリキー、ゴッソー、それに万葉集からと、石川啄木、森鷗外、夏目漱石、芥川龍之介など、そしてプラトン、アリストテレス、カント、ニーチェなどが素材となって追求されている。では、菅のいう人間のあり方としての「自己同一を欲望する」とは、ひとのどのようなあり方をさすのか。その「現象的説明」のはじめにあげているのが、ドストエフスキーの「死の家の記録」(1862年完結)のなかの、つぎのものである。(この「記録」は、シベリアにおける流刑囚の監獄生活を描いている)

『元来「囚人」ということばの全き意味は、自由をもたぬ人間ということである。』かれらは、閉じこめられ、鉄かせで縛られている。自分の思い通りに生きていけない。つまり自己同一を失っているのである。そのような囚人がどんなにはげしく自己同一を欲望するか、縛られ、縮められている自分を拡張のばし、大きく完全にすることにどんなにあつてい要求をもっているか。そのことをしめすこんな話が記されている。

「ときには獄吏たちもおどろくようなことがある。というのは、もう数年間、おとなしく模範的な生活をしてきて、善行ゆえに囚徒頭にまでなったような囚人が、だしぬけに全然なんの理由もなく——まるで悪魔でも憑かれたように——ふざけたり、ばかさわぎをしたり、狼籍をはたいたり、ときにはいきなり刑事的犯行をあえてしたりする——高級官吏にたいしては、あからさまに不敬をはたらくとか、だれかを殺すとか、女に暴行をくわえるとかいったふうのことをはじめるのである。」(中略)「しかし、もしかすると、そんなことをしでかしそうとは思っても見もしなかったこの男のこうした突発的爆発の全原因——それこそ一個の個性の憂うつな、けいれん的な表明であり、自分自身にたいする本能的憂愁であり、自己、虐げられた自己の個性を発現しようとする欲望…であるかもしれない」(33～34頁、下線は筆者)⁽¹³⁾

ドストエフスキーが書いたのは、要塞監獄のなかの自分自身の体験記録を土台に、その監獄の生活、笞刑、見捨てられた人びとの生理記録、囚人たちの描写、つまり民衆のさまざまなタイプの描写、農奴制の専横と暗闇をとおして、このなかでどれほど多くの青春がむなしく葬られ、どれほどなすことなくむなしく亡び去ったか、その異常な、不法な世界を記録したものであることは、知られている。まさに「死の家の記録」である。

菅は、この「死の家の記録」について「自由をもたぬ人間」——「自分の思い通りに生きていけない人間」「縛られて、縮められている人間」が、どのように自分を抜け、のびし、要求をもったものになるか、その関心について書いているが、「現象的説明」のなかでとりあげているのもそうしたさまざまなタイプの性格、その自己同一のあり方、欲望のあり方であり、まさに民衆のなかの一人ひとりであり、その不自由ななかでどんなにはげしく自己のあり方をもとめるものなのか、その内面の記録から人のさまざまな欲求をうかびあがらせようとする。⁽¹⁴⁾ つぎにその「文芸的心理学への試み」の本すじにすすみたい。

注

(1) 「旭川市民文芸」(旭川文化団体協議会)30号～35号(1988～1993)に「教師 菅 季治について」「科学的精神に生きた菅 季治」があるので参照された。

(2) 1941年の時期の旭川師範学校については、「北海道教育大学旭川分校六〇年史」を参照のこと。

(3) 田村 重見編著「友 その生と死の証し—哲学者 菅 季治の生涯」1987年私家版)による。

(4) 「凍土」No15 1988,10月刊による。この同人誌は、旭川師範学校美術部の治安維持法被疑者(1941年9月検束)として経験をもつ人たちによるものである。

(5) 旭川師範学校二年三組「菅 季治先生を偲ぶ」1992年北海道第三師範学校昭和二十年卒同期編による。

(6) 以上の講義のエピソードは、仁村 等、小関 寅雄、一柳 清、下田 剛、谷川 佳之、橋本 勝郎(1945年卒業)らによる座談会「菅季治先生を偲ぶ」会の証言による。菅は戦時の援農作業のあいまの学校のひととき、プリントでギリシャ哲学者の語録を探って、人生について語ってくれたという。援農のさい食料事情がわるければ、その改善を申し入れたこともある。紙上をかりて、この座談会を開いてくれた20年卒のみなさんに感謝申し上げたい。(1993年2月5日記録)本文中には小関の証言がある。

(7) 1994年1月6日の証言。石戸谷には、「太陽は死んだ」(1983年刊)があるが、これには菅とかわされた数多くの貴重な会話の記録がある。

(8) 菅のもう一つの遺著「哲学の論理」(1950年、弘文堂)の第一部「原理」でも「もののほんとうのあり方」が追求されており、(1)「もののほんとうのあり方は、矛盾的自己同一である」(2)「矛盾的自己同一とは具体的には、はたらいて自分であろうとするあり方である」となっている。論のはこびは、「もの」(もの、存在、人間)の相互関係、関係性、相互活動(はたらき、はたらきかけ、活動)を一貫して論究するものとなっており、「人生の論理」が「すべてのものは自分自身であろうとする」、主体の観点がつらぬかれているのにたいして、相互関係、対立を通しての自己同一のあり方を、積極的におしだしたものとなっている。

その論点はつぎのように要約できる。

(1) 「もの」は、自分と区別される「他者と相対立し、むきあい、矛盾しあう」ということをとおして、みずからのあり方を規定し、あるいは規定していくものである。

(2) 「もの」自身は「他者」から区別されることによって成りたっているが、その「他者」とは、それ自身、存在する主体そのものと考えられねばならない。「もの」の区別をなりたさせる「区別」を「他者」のがわからみることが、たいせつである。この主体どうしの関係、対立、矛盾のプロセスのなかで、

相互に「もの」が、みずからの自己同一をたかめていくものと考えられる。(「矛盾的自己同一」)

(3) こうして、「もの」「他者」は、その相互のはたらきかけをとおして、そのものの力・はたらきといったものをつくりだしていくことになる。「自分をささえる力」を見出だしていくのも、この区別と関係、対立と矛盾をとおしてである。

以上については、「教師・菅 季治について」(「旭川市民文芸」33号、1991年)に紹介したので、参照されたい。

(9) 菅は、東京文理科大学在学中に、ヘーゲル(G. W. F. Hegel, 1770~1831年)に学んだ、卒業論文「形式的論理学と弁証法的論理学」(1941年3月提出)を書いている。(前掲書 田村重見編著「友 その生と死の証し」に収められている)また、ヘーゲルの影響については、注(8)にもあげておいたが、くわしくは「哲学の論理」を参照のこと。なお、「まえがきー原理」には、スピノザ(B. Spinoza, 1632~1677)からの多くの引用があるが、後述とかさなりあうので省略した。

(10) 菅は、哲学は論理の学問であり、関係の論理的事態をとりだすことだと書いている。(「哲学の論理」)「人生の論理」が、人生、ひとがひとである根本を追求しているのにたいして、「哲学の論理」は「他者」との「関係」「はたらきあい」「活動」(能動と受動の相互活動)がしめされている。「ものの自己同一」と「他者」関係の考察については他日、稿をあらためたい。

(11) B. Spinoza; Ethicaについては、「倫理学」(上、下)(畠中尚志訳)岩波文庫を参照のこと。なおEthicaは「幾何学的秩序に従って論証されたエチカ」といわれているように「定理」「証明」「系」「備考」といった論証的なタームが使われている。

本文中の菅の引用については、旧版と思われるが、そのままとした。なお、戦時において菅が行ったSpinozaの理解は、菅のものが、はじめてだと思われる。スピノザ研究については、稲富 栄次郎「スピノザの哲学」(1939年、理想社)がある。

(12) 以上の菅ならびに学校についての証言は、上記、座談会「菅先生を偲ぶ会」から得たものである。

(13) ドストエフスキー「死の家の記録」については、新潮社文庫版(工藤 精一郎訳)をみた。適切な解説があるので参照されたい。本文中の引用は、「人生の論理」のままとした。

(14) 菅は、以上のような民衆の生活・人間・その性格、欲望のあり方、自由の希求といった、観点にたった記録をはやくから心がけていたと思われる。ポケットにしのばせた小さなメモ帳に、人のおもしろさユーモア、なにげない会話などを記録することがあったといわれている。帯広北部第九十一部隊で戦友を組んだ坂原義弘によると、菅のこうした記録は菅自身の人間学をめざしたものであり、隊の演芸などでひろうされ、かっさいをあびたことがあったという。(1993年1月24日記録)